

左の文は随筆『甲子夜話』続篇第五十一に収められた、「斉の女楽」に関する論説です。あとの設問に答えなさい。

〔前略〕『論語』を看し中、齊人女楽を婦と見へし所、何のことが註解にも詳らか成らぬやうに寛へしまし、頓て自見を聚て書綴しが、久しく笈中に捨置しを、頓て親出して林子へ示す。因て其答辞と併てこゝに挙ぐ。

〔林子からの答辞〕女楽解いかに精詳なること、殊更御文詞も前後よく調、聊か申候事無之候。冊中に御加へ固より異存無之、御至念之御事に存候。

『論語』(微子篇)に、「齊人婦ニ女楽」。李桓子受之。李桓子は魯国の大夫なり。女楽と云るは、吾師の『訳解』には女子善歌舞者とあれば、其頃の正楽には非ずして、女子の歌舞声容に艶態なる也。婦は「將レ納ニ之宮中ニ也」と。然ば齊この女楽を、魯の宮中に納んことを計し也。宮中に納んと計りし故は、朱注引ニ『史記』云、「孔子為ニ魯司寇ニ、撰ニ行相事ニ。齊人懼 婦ニ女楽ニ以沮レ之。」〔中略〕これぞ夫子の成徳を沮たる為方なり。然れば此女楽と謂は正楽別にして、俗士小人を悦しむる楽舞也。又注疏にも此旨を載たれども、『史記』に本と見えたれば、『史記』の所し書を云に、「於是選ニ齊國中女子 好者八十人ニ、皆衣ニ文衣ニ、而 舞ニ康楽ニ、文馬三十駟遺ニ魯君ニ、陳ニ女楽文馬於魯城南高門外ニ。李桓子微服 往觀。再三將レ受。乃 語ニ魯君ニ、為ニ周 道游 一、往觀 終日、怠ニ於政事ニ。」ケ様なることなれば、其装束も美飾にして、舞も浮華なる体なりしと聞ゆ。然ども始は宮中に入れざること聞て、先づ楽馬共に、城外の高門と云るにて其伎を為たる体なれば、今の芝居歌舞伎、勸進能などの趣なり。依レ是桓子は大夫なれば、表向にては赴れざれば、微服とて賤人の容にて、今の忍行など謂ふことにて、彼女楽を為す場所に往て見物せしなり。然るに固より浮華なる舞樂ゆゑ、桓子の俗情にては、面白きことと思て、今謂ふ、殿中の評議に、可レ受か受まじきかと相談ありしとき、桓子は可レ受と再三云て、乃定公に其ことを申上、引出したると見ゆ。以觀れば、最初は定公は不聞して、下計なりしが、桓子の感涙より事起し也。こゝが齊人の以色沮賢の計略の所し基なり。〔中略〕又『史記』に云る「舞康楽」と云ふこと、〔中略〕『家語』に「作ニ容璣ニ。王肅云、「舞曲名也」と有れど、康楽とは、雅樂梵楽などの如にして、一種の女楽故、其称なるべし。定て優靡なる豔曲舞なるべし。〔中略〕思ふに璣は『書』の舜典などにも、璣璣玉衡と見て、注には、「璣正天文ニ之器、璣為ニ輿運」とあり、『説文』には璣は美玉と言ふ、容璣とは、其舞様の美觀にして、吾邦婦女の松坂首頭など云踊に、環行して舞者の如きなるべし。三代將軍の御時命られし、安藤侯に伝たる踊も、觀し人の話を聞に環行して舞と云。然ば容璣、其環行のさまを以て名ぜし乎。何れとも周の頃女楽と謂しは、今の戲場より転て、貴人の宮中杯にも取行ふ、歌舞伎踊なる者の類にして、正楽を女子の舞には非る也。〔中略〕家虎が注も、〔中略〕文馬の下に注して、「文馬、文飾之馬也。蓋所ニ以載ニ女楽ニ之車乘」と見ゆ。是抛レ何云しや。齊の本旨は、善政を沮にありて、女楽を専と為なれば、成ほど文馬は女乗の物なるべし。然ば今都下の、神田山王等の祭祀に、女楽など盛飾して、花を挿たる轎、或以金銀の紙貼色したる行台など用の類にして、夫を魯の城下に連行たる也。然ば桓子の定公を誘て、「為ニ周道游、一、往觀 終日」と云るも、尤なる事なり。其体を想觀べし。大造なることと見ゆ。全く芝居歌舞伎などの如き結構にして、桓子も奄に迷れたる也。何にも聖人を沮むべき大為懸なり。〔後略〕

(東洋文庫375『甲子夜話続篇』4〔中村幸彦 中野三敏校訂 一九八〇〕より引用。(一)付キルビ、および脚注を新たに加えた)

注

①【林子】 林述齋(一七六八―一八四一)のこと。儒者。『甲子夜話』著者に随筆執筆を勧めた人物で、『甲子夜話』のなかには彼の意見がたびたび紹介されている。

②【冊中】 この「甲子夜話」のこと。

③【李桓子】 魯の国の大夫、季孫氏。名は斯。

④【吾師の『訳解』】 著者の師である儒者の皆川淇園(一七三五―一八〇七)が著した『釋解』。

⑤【朱注】 朱熹(朱子)による『論語』の注釈書『論語集注』

⑥【注疏】 『論語集解』『論語義疏』をもとにして、邢昺が詳細な注を加えた『論語注疏』。

⑦【文衣】 美しい衣裳。

⑧【文馬】 美しく飾り立てた馬。

⑨【駟】 四頭立ての馬車。

⑩【浮華】 うわべばかり華美で実質が伴わないこと。ここでは、単に「華美」といった意味か。

⑪【大夫】 中国の周代から春秋戦国時代にかけての身分で、領地を持った貴族(王族・公族も含む)。

⑫【殿中】 將軍のいる江戸城内。

⑬【定公】 生年不詳、紀元前四五五。魯の第二十六代君主。

⑭【家語】 『孔子家語』、『論語』に漏れた孔子一門の説話を蒐集したとされる書。

⑮【王肅】 中国三國時代の政治家。魏に仕えた。一九五生―二五六歿。

⑯【書】 『書経』のなかで、伝説上の聖人の舜について記された一篇。

⑰【注】 王肅による注釈書か。

⑱【転運】 『角川大辞源』(一九九二)には、⑳めぐりうくる。めぐりゆく。㉑歌や音楽の節回し。転折ともいう。とある。

⑲【説文】 中国後漢の辞書『説文解字』。

⑳【松坂首頭】 伊勢国(三重県)の古市で、江戸中期に作られ歌われ出した俗謡。伊勢詣りの流行にともなって全国に広まった。

㉑【環行】 ある物の周囲をめぐること。

㉒【三代將軍の御時命られし、安藤侯に伝たる踊】 高崎藩藩主、安藤家が伝えた「御家踊り」。二代藩主の安藤重長(一六〇〇―一六五七)はこの踊りを三代將軍徳川家光の御前で踊った。

㉓【家虎】 後漢末期、三國時代の武将・政治家である司馬懿(一七九―二五二)か。

㉔【神田山王等の祭祀】 江戸(現東京)の神田明神の神田祭、日枝神社の山王祭。

㉕【行台】 古代中国の役所名ではなく、ここでは、装飾をほどこした台車や輿のようなものか。

㉖【大造】 大きな効果をあげること。

問一 『甲子夜話』の著者を選びなさい。(番号にて回答しなさい)

- ① 柳沢 淇園 (一七〇三～一七五八)      ② 鴨 長明 (一一五五～一二一六)  
③ 吉田 兼好 (一二八三?～一三五二?)      ④ 松浦 静山 (松浦清 一七六〇～一八四二)  
⑤ 貝原 益軒 (一六三〇～一七一四)

問二 魯において齊人女樂が演じられた場所の観点から、著者が考えた齊人女樂に相当する日本芸能・行事は次のうちどれか? 番号で答えなさい (複数選択可能)。また著者がどのように考えた根拠を説明しなさい。

- ① 神田祭      ② 舞楽      ③ 康楽      ④ 勸進能      ⑤ 梵楽  
⑥ 松坂音頭の踊      ⑦ 伎楽      ⑧ 安藤家に伝わる踊      ⑨ 芝居歌舞伎 (歌舞伎踊)      ⑩ 山王祭

問三 舞踊のフォーメーション (隊形・列伍) の観点から、著者が考えた齊人女樂に相当する日本芸能・行事は次のうちどれか? 番号で答えなさい (複数選択可能)。また著者がそのような見解に至った思考過程を説明しなさい。

- ① 神田祭      ② 舞楽      ③ 康楽      ④ 勸進能      ⑤ 梵楽  
⑥ 松坂音頭の踊      ⑦ 伎楽      ⑧ 安藤家に伝わる踊      ⑨ 芝居歌舞伎 (歌舞伎踊)      ⑩ 山王祭

問四 この著者が考える「正楽」とはどのような楽舞か? そのことに言及したうえで、この論説のユニークな視点、あるいは疑問点について、あなたの考えを述べなさい。

令和4年度（2022年度）

京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程入学試験問題

日本音楽研究専攻 小論文

問

「演奏実践に基づく研究」について、あなたが考える（あるいはあなたがこれから行おうとする）研究方法を述べなさい。もし、あなたが参考にした先行研究があれば、その研究方法にもふれてください。